

新藤兼人

愛妻記



雑草に

かくみえ

いた

夕顔の

岩波書店

愛妻記

新藤兼人

愛妻記

定価 1500 円(本体 1456 円)

1995 年 12 月 5 日 第 1 刷発行
1995 年 12 月 8 日 第 3 刷発行

著 者 しんどうかねと
新藤兼人

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電 話 案内 03-5210-4000

印刷・三陽社 カバー・錦印刷 製本・三水舎

© Kaneto Shindo 1995

ISBN4-00-002470-1

Printed in Japan

愛妻記

「耳もとへ口をよせて、乙羽さん、とそつと呼んだ。

乙羽さんがゆっくり目をひらいて、顔を少し傾けてわたしを見た。目にはちからがなかった。黙ってわたしを見てるので、わたしも黙っていた。

唇がうごいたので、顔をよせると、

「センセイが、目が見えなくなったら、仕事をやめて、手をひいてあげようと思ったのに……」

低い声で言った。やつと声にしたようであった。

それきり、じつとわたしを見ているので、わたしは唇づけをした。

乙羽さんはこたえたが、舌にはちからがなかった。

乙羽さんは目を閉じた。ベッドにかがみこんでいたわたしは、体を起こして、乙羽さんの白い顔を見ていた。

わたしが右目を失明しているので、左も失うようなことがあったら、シナリオライターとして

はお手あげだな、と言っていたのである。

これが乙羽さんの最後の言葉だった。それから荒い息をしてこんこんと眠りつづけ、二日目に、しだいに呼吸が弱まった。

医師に、乙羽さんは苦しいのでしょうか、と問うと、いやそんなはずはありません、痛みはな
いはずです、とおっしゃった。

わたしは、なにもしてあげることがないので、毛布の下の乙羽さんの腕をとってさすっていた。
口のきけない乙羽さんに、それはわたしの対話であった。

腕が、しだいに冷えていくような気がしてきた。これが別れなんだな、とわたしはさすりつづ
けた。

乙羽さんの呼吸がとまった。医師がご臨終ですと言った。

乙羽さんの顔を見ると、安らかな顔をしていた。死んだ真似をしているようだ。わたしは悲し
みよりか、ああ、これで乙羽さんは楽になったなと思った。

平成六（一九九四）年十二月二十二日九時二十三分だった。享年七十。

七階の病室から地下の霊安室に移された。看護婦さんがうつすらとメーキャップをしてくださったので、乙羽さんは生きているようだった。

入院するときに持ってきた外出用のスーツを着せられていた。これは正月に逗子の家へ行くために、乙羽さんが用意したものだった。

毎年暮れの二十八日から正月四日まで逗子で家族とだんらんを楽しんだ。逗子へ行けると思ったのであろうか。もう病院から出ることはできないだろうと秘かに覚悟をしていただろうに、万一かなうなら、病院車ででも逗子へ行くつもりでいたらしい。

葬儀屋がきて、てきぱきと、霊安室から赤坂のマンションへ運んでくれた。ここは乙羽さんとわたしが十七年間暮らしたところである。まずここへ帰るのがいちばん自然に思われた。

狭いマンションだから、机や椅子などを外に出して乙羽さんの寢床をつくった。息子夫婦や娘や孫や、乙羽さんの付人のヨシ子ちゃんなどがことをはこんでくれた。

葬儀屋の話によると、明二十三日は天皇誕生日で祝日、二十四日は友引で落合の焼場は休みで、

二十五日に告別式をやって焼場へ行くことになった。それで乙羽さんは三日間うちにいることになったのだ。これは幸いであつた。わたしたちは乙羽さんとゆっくりお別れができるのだ。乙羽さんの周囲はたちまち献花で埋もれた。

マスコミで報道されたので、マンションの表はテレビカメラがひしめき、弔問にきてくださる方に迷惑をかけることになった。わたしはインタビューを申しこまれたが、うける気にはなれなくて、乙羽さんの傍らでじっとしていた。

乙羽さんは無宗教だった。つね日ごろ、生きているときだけの命だ、と言っていた。宗教を嫌うのではなく、宗教に関心がなかったといつていい。わたしも乙羽さんと同じ考えなので、告別式はそのように頼んだ。

先に殿山泰司君の告別式を信濃町の千日谷会堂でやって、感じよくやれたので、乙羽さんも千日谷会堂でやってもらうことにした。

乙羽さんは独立プロ近代映画協会で四十年も共に仕事をしてきた同志なので、近代映画協会葬とすることにし、映画『裸の島』の音楽で送ることにした。『裸の島』は乙羽さんの代表作の一つである。林光氏の音楽を乙羽さんは気に入っていた。

マンションには寝室と物置部屋しかなかったので、わたしの他に、嫁か娘か孫のだれかがかわるがわり泊ってくれた。

わたしはかなり疲労していたので、夜中に目覚めた。隣りの部屋を見ると乙羽さんが寝ていた。乙羽さんは着物に着替えていたので、胸がきつちりとしまって、目は閉じているが、唇は紅く、生きているようだった。

いつも、わたしたちは一つベッドに寝ていたので、こうして独り寝ている乙羽さんは別人を見るようだった。

ほんとうに死んだのだろうか、という錯覚がくる。いまにもぱっと目を開いて、あら、センチ、どうしたの、といいそうだ。乙羽さんは四十年もまえ『愛妻物語』を撮ったとき以来、ずっとわたしをセンチと呼んできたのだ。だからわたしも、乙羽さん、とさんづけで呼んでいる。そっと乙羽さんの頬にふれてみた。氷のように冷たかった。乙羽さんの両脇と腰のあたりはドライアイスで固められているのだ。乙羽さんは死んでしまったのだ。

一年前の平成五年（一九九三）七月二十七日、乙羽さんは駿河台の三楽病院で肝臓がんの手術をした。

乙羽さんは以前から、乙羽さんの馴染みの個人病院で肝臓の手当てをうけていたが、医師からC・Tをとることをすすめられ、とったところ肝臓にがんの痕跡がみえて、医師の紹介で三楽病院で診断をうけることになった。

そのとき、乙羽さんは二本のテレビの仕事を受けていた。一本はフジテレビの『湯煙り仲居純情日記』で塩原ロケが四日間あった。他の一本は近代映画協会の仕事でテレビ東京の『野菊の如き君なりき』でこれも茨城へ四日間の泊り込みの仕事だった。乙羽さんはかなり弱っているふうだったが、仕事をおりるとはいわなかった。

七月十四日、『野菊の如き君なりき』を了えて、翌十五日三楽病院へ入院した。診察は河野医師だった。河野医師は殿山泰司君も診察をうけたことがあり、乙羽さんとも面識があった。

河野医師が、のちに話してくださったのだが、乙羽さんの病状はもはや末期的にすすんでいた

ということだった。

一週間ほど精密検査をうけたが、二十二日に手術と決定した。乙羽さんは二泊をゆるされて赤坂のマンションへ帰ってきた。

手術は近親者の承諾がいるものだった。大きな手術であった。もしものことがあるかもしれない。だから手術のまえに帰されたのである。

乙羽さんが、手術についてなにもふれないから、わたしも黙っていた。乙羽さんはわが家へ帰ってほっとしたようだった。さっそくいつものガウンに着替えて、ベランダのガラス戸を開けて「チャー君、チャー君」と呼んだ。

その声を聞いてチャー君がやってきた。オスのトラ猫である。生れたてのまだ目があかない赤ん坊を母猫がくわえてやってきて、以来うちのベランダに棲みついている。そのほかにも野良猫は三、四匹やつてくるのだが、どういうわけかチャー君だけが乙羽さんになついた。

野良猫たちにはキャットフードを与えている。猫たちは朝と昼と夜、どこからともなく現れて、ベランダにきちんと前肢を立てて行儀よく坐っている。缶詰のキャットフードを与えると、がつと横かじりに急いで食い、おわるとさっさと行ってしまう。

チャー君と命名したのは乙羽さんで、茶色のトラ猫だからチャー君としたのだ。乙羽さんはなにごともこういうふうで、三毛猫がくるとマダラちゃんである。

チャー君が、ある朝くしゃみをはじめ、昼になってもとまらない。乙羽さんは、どうしたのチャー君、くしゃみがとまらないわね、風邪をひいたのね、とか言っていたが、とつぜん顔色を変え、肺炎になったらしいへん、センセイ、早く病院へ、と大騒ぎ、近所のおばさんに病院へ連れて行ってもらって七日間入院して七万円とられた。それをケダモノといえどもチャー君は知ってのことだろう、乙羽さんの顔を見るとしつばを立ててすり寄った。

その夜、わたしたちは早くベッドにはいり、歓談をつくした。『愛妻物語』のセットが暑かったこと。昭和二十六年というところ、まだステージには冷房がなかった。天井にいる照明部さんがぼつりぼつりと汗をセットへ垂らした。

乙羽さんと最初に会ったとき、背中感じがとても亡き妻に似ていると思った。

『原爆の子』のとき、乙羽さんは自転車に乗る役なのに乗れない。そこで猛練習を開始した。合宿の宿の横手でやったのだが、乙羽さんがハンドルがとれなくて生垣へ顔を突っこむので、主役のスターに顔にきずでもさせたらたいへんなのではらはらしたものだ。

広島から近くの島へロケに行き、帰りにとつぜん豪雨に見舞われた。船は五十噸トばかりの荷役船で隠れるところがない。全員ずぶ濡れだ。だれかがロシア民謡のカチューシャの唄を歌い、みんなで合唱した。

夜明けになってわたしたちはやっと眠った。

二日目の夜、乙羽さんは病院へ向ってわが家を出た。付人のヨツちゃんが付添い、会社の井端君が車で送ってくれるのだ。

ドアを出るとき「行ってきます」と乙羽さんは言った。いつでも乙羽さんは、出かけるとき、まるで小学生のように「行ってきます」というのだ。

そのときの背中が、いまでもわたしの目にこびりついている。なにかをいっばいにたたえている背中だ、たった独りで手術に向かう背中だ、気を張りつめているような背中、たまらなく寂しい背中、わたしはなにか声をかけたい衝動をがまんしていた。

七月二十七日に手術された。四時間かかった。待機していたわたしは手術室のドアのところへ呼ばれた。乙羽さんは病室へ戻された直後だった。河野医師と他の二人の医師によって執刀されたのだ。

「あとで詳しく説明しますが、手術はおわりました。結果を申し上げますと、あと一年か一年半の命だと思います」

わたしはまずお礼をいった。やはりという感じであった。足もとがぐらつかないで立っていることができた。手術のまえの乙羽さんの体をよく知っているから、こういう宣告も覚悟はしていた。わたしは河野医師の人格も手腕も信頼していたので、よく助けてもらったと思った。

病室へ戻ると、乙羽さんとはときどき眉をしかめて痛そうだった。麻酔がとけてくるのだ。可哀

そうだがどうすることもできない。わたしと一緒に河野医師の宣告を聞いた息子に、一年の寿命のことは乙羽さんに話さないことにしようと言った。息子も賛成した。

がんで寿命の宣告をうけたとき、本人に話して、余命をいかに過すかを本人の意思にゆだねる方法があるが、わたしはその方法はとらなかった。話さなくても、いつか本人がわかる時があるだろう、そのとき本人はしぜんなたちで知るだろう、それが乙羽さんには最善と思えた。

またこういう考えもあった。一年か一年半といわれても、療養しだいでは一年が二年になり一年半が三年になる場合もあるかもしれないと思いたかった。

乙羽さんの手術は詳しく河野医師から説明されたが、肝臓の右はすっかり機能を失っているので、左の肝臓がたよりだが、これもがんがひろがっているので、これに抗がん剤を注射する。その方法は直接肝臓に影響するように、管を使ってじかに注射をする化学療法。そのために腹部に広告マツチ大の注射用器ガンフを埋めて、それから注射を一週一回する。そしてドイツ製の抗がん内服薬を飲みつづけるという療法で、専門的にいうと経肝動脈化学療法。

二日目から乙羽さんは話せるようになり、三日目から痛みもとれた。麻酔をかけられたとき、うすれていく意識のなかで、もうこれでおしまいか、と思ったそうだ。煙草をのみたいといったが、煙草はかたく禁じられていた。乙羽さんは煙草のみなのだ。わたしが煙草をのむと肺がんになるからよしなさい、というと、ハイハイと言って、やめなかった。わたしの言うことをきか

ないことは何ひとつない乙羽さんだったが、これだけは、ハイハイといいながらのんだ。

食事が出はじめると乙羽さんは食欲旺盛でよく食べ、元気を回復した。わたしは毎日午後三時に見舞った。三時からが面会時間なのだ。乙羽さんの病室はいつも賑やかだった。宝塚の同期生や先輩後輩たちがひきもきらずみえるのだ。そして芝居関係の人たち。そんなときわたしは休憩室に退いて間を持たせた。休憩室は明るいガラス張りの部屋で、患者たちがテレビを見たり雑談にふけていた。

病室は花東の山だった。これでは楽屋と変らない。乙羽さんが疲れるのではないかと思つたが、乙羽さんはかえって元気がでるふうであつた。寿命の限界を乙羽さんに言わないでよかったと思つた。

わたしは病室にはいつて行くと、乙羽さんは付人のヨツちゃんに命じて、冷蔵庫からメロンとかパイヤとか、冷えたヨーグルトとかを出させた。見舞いにきた人たちの持参の品がわたしのためにとつてあつた。

この夏は、涼しい病院で暮らすんだな、と医師から言われたと乙羽さんは言った。もう八月の半ばに達していた。個人部屋なのでトイレ、バスもあつて、ちょっとしたホテルの快適さがあり、大きな窓からは広い空がひろがっていた。

「センセイ、寝巻きを毎日とり替えてくださいよ」

と言った。

わたしは寝巻に浴衣ゆかたを着ている。これにはガーゼのやわらかい裏地がついていて、とても気持ちがいい。夏冬とおしてこれだ。部屋着にもしている。宅急便や新聞の集金人やスーパールの配達人たちは、寝巻で出てくるわたしを見て、いつも病気が何かで寝ているものと思うらしい。この姿が机に向つてものを書くのにいちばん楽なのだ。体ぜんたいに負担がかからない。体が楽だとイメージがわき易いとわたしはきめている。

乙羽さんはこの浴衣をいっぺんに大量に買いこむ。わたしは背丈が短かいので裾を切るようだが、これも乙羽さんがやる。老眼鏡をかけて針のメドに糸を通しているのをときどき見かけた。乙羽さんは、なにからなまでに、徹底的にわたしの面倒を見ようと思っているから、パンツ、下着、靴下まで自分で買ってこなければ気がすまない。

「メロンを食べなさい」

「メロンを食べすぎると血糖値があがるといけないから」

わたしはこの病院で糖尿を治してもらい、毎月定期的に血糖値の数値を見てもらっている。

「血糖値ばかり気にかけていて美味しいものを食べないと、栄養失調になりますよ」

「ひとのことを心配してるけど、自分のほうはどうなの」

「きょうは一階まで階段を下りて行って、上ってきたの、ねえ、ヨッちゃん」